
バカと兄弟と召喚獣

紫炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと兄弟と召喚獣

【Nコード】

N5208Z

【作者名】

紫炎

【あらすじ】

二年生になった吉井明久は自分の双子の弟共に遅刻していた。この物語はそんな二人と＋を中心に進む物語である。

プロローグ（前書き）

他にも書いている小説があるのですが、どうしてもこれが頭から離れなくなり書いてしまいました。

今までの作品と書き方を変えてあるので、ご意見、ご指摘がありましたらどうぞ。

プロローグ

桜舞い散る坂道を二人の少年が駆けていく。

「兄さん、急げ！」

「わかってるよ！」

二人は道を走って行って、そしてとある学校の正門にたどり着く。

その学校の名前は文月学園。彼らはその生徒である。

走ってたどり着いた文月学園の正門には門を閉めようとしている先生がいた。駆けてくる二人に気づいたのか、門を閉めようとするのをやめて二人に話しかける。

「遅刻だぞ、吉井兄弟！」

「ああ、おはようございます先生」

「あつ、鉄……西村先生」

「おはよう、明峯。それと吉井、今『鉄人』と言おうとしなかったか？」

「気のせいですよ」

二人のそれぞれ異なった反応に西村先生は顔をしかめた。

俺こと吉井明峯は今回寝坊した兄さん、吉井明久と共に学校に遅刻した。昨日はあれほど言っただが……。

「それよりお前ら、一言足りないぞ」

「えっ？ えっと……？ 今日も肌が黒いですね」

「遅刻の謝罪よりも俺の肌の色が大事なのか、お前は……」

「兄さん、遅刻の謝罪だ」

「あつ、そうか。遅刻してすみません」

「……吉井、保健室に行つてこい」

「なんで!？」

ちゃんと謝つたのにどうして保健室に行かないといけないんですか。俺は呆れながらもとつと切り上げることにした。

「それより先生、例の紙を」

「うん？ ああ、そうか。ほれ」

西村先生はすぐ側の箱の中にある封筒を取り出すと俺たちに渡してきた。俺たちはそれを受け取る。

「振り分け試験の結果だ。よく見ておけよ」

「「はあゝい」」

封筒を受け取った俺たちは封筒の口を破こうとする。

「吉井兄弟、今だから言うがな」

俺たちに封筒を渡すのと同時に西村先生が遠くを見ながらしゃべり出す。

「俺は去年一年間のお前達を見て、『もしかすると、吉井兄弟はバカなんじゃないか?』なんて疑いを抱いたんだ」

「それは大いなる誤解ですね。そんな誤解をしているようじゃ『節

穴』なんて渾名をつけられちゃいますよ?」

俺は封筒をゆっくりと開けたが、兄さんがまだ開けていないので待つとする。

「ああ、振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違えに気づいたよ」

「そう言って貰えると嬉しいです」

やっと封筒を破いて中身を見る兄さん。俺も自分の結果を見ることにする。

「喜べ吉井兄弟。お前達への疑いはなくなった」

折りたたまれた紙を広げて、書かれているクラスを見る。

『吉井明久…… Fクラス』

『吉井明峯…… Fクラス』

「お前達は正真正銘のバカだ!」

「そんなバカな————!!」

予想外の結果にショックを受ける兄さん。俺は兄さんを慰めつつ、西村先生に一言文句を言う。

「先生、俺たちの成績が悪いことは認めますが、いきなり『バカ』呼ばわりはどうかと思いますか?」

「そう呼ばれたくないなら、それ相応の成績を取るんだな」

西村先生の言葉にも一理あるため、俺は兄さんを慰めながらFクラ

スへと向かった。

今日、この時から俺と兄さんの学年最低クラス的生活が始まった。

プロローグ（後書き）

どうでしたか？

次回もお楽しみに。

設定（前書き）

今後に変更されると思います。

設定

人物設定

吉井明峯

17歳

性格

冷静な反面、とあることが関わるとボケに走るボケと突っ込みの両属性。

容姿

ほとんど明久と同じだが、体格はがっしりとしている。明久との相違点は髪型が刹那・F・セイエイ（2期バージョン）と同じ髪型であること。そんな髪型にした理由は不明。

その他

明久同様家事は良くする方で、ちょっとしたこだわりもある。武術と水泳をやっていたため、体力と運動神経共に高い。兄を暴力と不幸と理不尽から守っている。

召喚獣

???

好きな物

ガンダム00 明久が作るパエリア

嫌いな物

同性愛者、敵

特技

喧嘩技、空手、柔道、水泳、銃の狙い撃ち

第1話（前書き）

書き方を分けて書くのって難しいですね。どっちなかに固定しようかな？

それでは、どうぞ。

第1話

問題

『調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。このときの問題とマグネシウムの代わりに用いるべき合金の例を1つあげなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると、激しく酸素と反応するため危険であるという点
合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので鉄ではダメと言うひっかけ問題なのですが、姫路さんは引っかけかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払ってなかった事』

教師のコメント

そこは問題じゃありません

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いと言われても

吉井明峯の答え

『問題点……マグネシウムで作られた鍋を使ったこと

合金の例……C B 製Eカーボン』

教師のコメント

問題点はそれを聞いているではありません。合金に関しては趣味をこつちやにしないでください。

文月学園

学力低下が嘆かれる昨今に新風を巻き起こし、進学校であると同時に“試験召喚システム”の導入により最新技術の実験場としても知られている。それだけに多くのスポンサーが付き、学費が極めて安い学園である。

そんな学校の校舎のとある一角。遅刻者である吉井明久と吉井明峯は2・Aクラスを覗いて驚愕していた。

「ものすごい設備だったね、Aクラス」

「程度つてもものがあると思うけどな」

明久はまるで別世界のようなだったと感嘆し、明峯はあまりの設備に顔をしかめていた。どうやら明峯の気にはそぐわなかったらしい。

「兄さん、とつとFクラスに向かうぞ」

「うん、分かっているよ」

二人はAクラスを後にして、Fクラスへと向かった。

Fクラスへとたどり着いた二人はまた別の意味で驚愕した。

「……ミネ、僕は田舎の学校に来たつもりはなかったんだけど」
「兄さん、現実から目をそらすな」

あまりの落差に明久と明峯は驚愕していた。Fクラスの廊下側の窓や壁には所々亀裂が入っており、表札は真ん中から折れていた。

「これが格差社会の現実なんだね」
「とにかく入るぞ」
「うん」

落胆していた明久だが気を取り直して明峯と共にFクラスに入る。

「すみません、ちょっと遅れちゃいました」
「早く座れ！ このウジ虫やろう！」

入って早々罵声を浴びせられた。

誰だと思い、兄さんを押しのけて教壇の方を見る。そこには教師ではなく、悪友？こと坂本雄二がいた。

「何をしている、坂本」

「先生が遅れているらしいからな。代わりに教壇に立ってみた」

「いや、俺が言いたいのはそう言うことじゃなくて……」

「俺がこのクラスの代表だからな。全員の顔を覚えておく意味でここに立っているだけだ」

「……もういい」

俺は坂本に文句を言うのを諦めた。そこに初老のさえない男性教師が現れる。

「すみません、通してください」

「ああ、すみません」

「先生、席順が分からないんですけど」

「席は自由です」

「席順も決まってないの!？」

席順も決まってないって……本当に大丈夫か、このクラス。俺は呆れながら、兄さんが座った窓際の席の隣に座った。全員座ったのを見て、HRが始まる。

「えー、みなさん。進級おめでとうございます。私がこのFクラスを担当する……」

教師が振り向いて黒板に名前を書こうとしたが、

「福原慎です。よろしく願います」

チョークがなかったのか、書くのを断念してこちらに向き直った。チョークまでないとは……噂以上の酷さだな。

「皆さん、卓袱台と座布団は支給されていますか？ 不備があれば、申し出てください」

不備があるかと言われても不備しかないような気がするが……。福原先生の話聞いて早速一人一人手が上がる。

「先生。俺の座布団、綿が入ってないんですけど」

「我慢してください」

「俺の卓袱台、脚が折れています」

「木工ボンドが支給されているので、後で自分で直してください」

「窓が割れてて、隙間風が寒いんですけど」

「ビニール袋とセロハンテープを申請しておきますので、後で直してください」

どうやら不備があっても極力、自分の力で直すしかないようだ。大工にでもするつもりなのだろうか、ここは。

「これから必要なものがあつたら、極力自分で調達するか、直すようにしてください」

「これがFクラスなんだね、ミネ」

「そうだな兄さん」

俺たちはこの現実を受け入れて1年間過ごしていくしかないようだ。全く、病人でも出たらどうするつもりなんだ。俺の心配を余所に自己紹介が始まる。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。今年1年間、よろしく頼むぞい」

彼は木下秀吉。よく兄さんが『女の子』と間違える可憐な姿を持つ

男子だ。裏情報では告白された数がとうとう100桁に突入したらしい。しかも、男から。

「……土屋康太」

次は無口そうな男子、土屋康太だ。彼にはとある異名があるが、本人は名前で呼ばれたいそうだ。いつも自前のカメラを持っていて、あるシャッターチャンスを狙っている。

「ねえ、ミネ。さつきから聞こえてくるのは男子ばかりだけど、Fクラスって女子はいないのかな？」

「さあ、聞いていれば聞こえてくるんじゃないか？」

男子ばかりしか聞こえてこないため、兄さんが俺に話しかける。俺としては大助かりだ。兄さんは昔から女難に遭っているし、まともな女性に会った試しがないからな。

「……です。海外育ちで日本語は会話は出来るけど、読み書きが苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は……」

うん？ この声って確か……？俺は声ができる方を見てみると、そこには兄さんの天敵にして俺の敵でもある島田美波がいた。何故敵かって？それは……

「吉井明久を殴ることです」

ということだ。こいつは事あることに兄さんに殴りに掛かる。そのせいで一時期は軽い女性恐怖症に陥りかけたというのに……。俺は兄さんに笑顔で手を振ろうとする島田を、俺の体を使って兄さんの

視界から遮った。

「ミネ？」

「ん、何でもない」

兄さんが俺の行動に疑問を持ったが、俺は何でもないと軽く流した。かわりに島田からが俺に敵意を向けたが。その後は名前を言うだけの作業が続き、俺の番になった。

「吉井明峯」

俺も名前だけ言って着席する。兄さんが何か言いたそうにしたが、お構いなしだ。そして兄さんの番になる。

「吉井明久です。気軽に……やっぱ良いです」

「……兄さん、何を言おうとしたんだ」

「あ、あはは。ちょっと冗談を言おうとしたんだけどね」

気軽に『ダーリン』とでも？ 古傷抉るようなマネはやめるべきだな。次の人に回ろうとしたとき、急にドアが開く。

「あの、遅れて、すみま、せん……」

「えっ？」

急に開いたドアを見て、Fクラス全員が驚いた。そこには一人の少女がいて、こことは場違いとも言える人物、姫路瑞樹がそこにいた。

第1話（後書き）

どうでしたか？

次回もお楽しみに。

第2話（前書き）

ちよつとしたお知らせを『規格外』のほうに投稿しました。是非見てください。

それでは、どうぞ。

第2話

突如現れた女子、姫路瑞希に全員の視線が注目する中、福原先生が姫路に話しかける。

「丁度良かったです。今自己紹介をしているところなので、姫路さんもお願いします」

「は、はい！ あの、姫路瑞希と言います。よろしくお願いします！」

緊張しながら自己紹介を済ませる姫路。どうして彼女が……と俺が考えている中俺と同じ疑問を持った生徒が一人尋ねる。

「はいっ、質問です！」

「あ、はい！ なんですか？」

「何でここにいるんですか？」

失礼極まりない質問だが、Fクラスにとっては当然の疑問である。彼女は容姿も人目を引く程で、テストでは1桁の順位に必ず名を連ねている学力の持ち主である。故に最高設備クラス、Aクラスにいると誰もが思っていた。

俺もそう考えていたが、兄さんが振り分け試験の時に話したことを思い出して一人で納得する。

「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまして……」

そうなのである。振り分け試験の日に途中退席したと兄さんから聞いていた。だから0点にされたのであろう。

「そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

「ああ、化学だろ？ あれは難しかったな」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて、実力を出し切れなくて」

「黙れ1人っ子」

「前の番、彼女が寝かせてくれなくて」

「今年一番の大嘘をありがとう」

姫路の理由を聞いてか、他の奴らも言い訳を始めた。俺は余りにも惨めに見えて、呆れていた。

「そ、それでは1年間、よろしくお願いします！」

そう言っただけ姫路は俺たちの近くの席に座り、安堵の息をついて卓袱台に突っ伏す。兄さんは姫路のことが気になってか、話しかけようとした。

「姫路さ「姫路」」

だが、そこで坂本が割り込む。坂本、貴様……。

「は、はい！ えーと……」

「代表の坂本だ。よろしくな」

「はい、よろしくお願いします」

ちやっかり自己紹介と等を済ませている。そして兄さんは固まっていた。兄さん……

「ところで姫路、体調は大丈夫なのか？」

「あつ、それ僕も気になる」

「よ、吉井君!？」

坂本が体調を気遣うと、兄さんもそれに乗っかる形で話しかける。それに対して驚く姫路。

「姫路、明久が不細工ですまん」

「……姫路、坂本が勘違いのゴリラですまない。心から謝罪する」

割り込むばかりか罵倒されて兄さんがとても悲しい顔をしたので、俺もやり返す。

「えっ、えっと……」

二人同時に言われたせいか混乱する姫路。俺は姫路に構うことなく坂本と対峙する。

「てめえ、良い度胸じゃねえーか……」

「先に仕掛けたのはそっちの方だ。やるならやられる覚悟はあるだろう?」

互いに睨み合う中、姫路はしゃべり出す。

「そつ、そんな事ないですよ? 目もパッチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、その、むしろ……」

「まあ、見てくれは悪くないもな。俺の知人にも明久に興味がある奴がいるし」

急に俺との睨み合いを放棄して、語り出す坂本。何だ? 何のつもりだ……? 俺は突然のことに顔をしかめる。

「えっ、それって誰「それって誰ですか!？」わぁ!？」
「確か、久保……利光だったか？」

久保って……、あいつは男だぞ。何て思っていたら兄さんが急に怯えながら抱きついてきた。顔も少し青ざめている。俺はしまったと頭を抱えた。なぜかって？ それは……

「坂本、その手の話はやめろ」

「うん？ どうしてだよ？」

「兄さんはホモにトラウマがあるんだ。だから、やめろ」

「そうだったのか……それはさすがに悪かったな」

「……お前、全然悪いとは思っていないだろ？」

俺は坂本に注意するが、坂本はニヤニヤと笑いながら兄さんの今の状態を見る。こいつ……！ 俺は坂本に一言文句を言おうとするが、
パンパン！

「はいはい、その人たち静かに」

福原先生に注意されて、やむなく断念する。ちっ、間の良い奴め……。俺は心の中で舌打ちをしながら、先生に謝る。

「あっ、すみま」

バキィ！ パラパラパラ……

「せ……ん……」

俺が謝っている途中に教壇が壊れた。……本当に学習させる気があ

るのだろうか、ここは。俺は本日何回目かになるため息をつく。

「……えー、代えを持ってきますので、皆さんは自習をしていてください」

そう言つて福原先生は教室を後にした。クラスメートは自習するわけもなく、各々喋り始める。俺は先生が来るまでの間、怯えてしまっている兄さんを慰めることにした。

「兄さん、大丈夫だから、な？」

「う、うん。分かっているよ……」

兄さんは徐々に落ち着いてきたのか、俺を抱きしめる力を緩めてきた。その光景を見て、坂本はばつの悪そうな顔をする。

「……こりゃ、重傷のようだな」

「分かってくれたのなら、何よりだ」

「あの、何かあつたんですか？」

「ああ、昔にちよつとな」

俺は坂本と姫路に対して異なる対応する。兄さんも完全に落ち着いたらしく、俺から離れた。そこから兄さんと少し話していると、先生が帰ってきた。

「それでは、自己紹介の続きをお願いします」

自己紹介が再開すると、名前と趣味程度の紹介でどんどん過ぎていく。そして坂本の番になった。坂本は席から離れて、教壇に立って紹介を始める。

「代表の坂本だ。代表とでも坂本でも好きに呼んでくれ。さて、みんなに一つ聞きたいことがある」

そう言つて坂本は教室の各所を見る。全員がそれにつられて、坂本が見ている場所を見る。

かび臭い教室

綿が入ってない座布団

脚の折れた卓袱台

割れた窓

「Aクラスは冷暖房完備の上に座席はリクライニングシートらしいが……」

「不満はないか？」

「『大ありじゃあーーーーー!!』」

坂本の誘導に触発されて、Fクラスのほとんどが雄叫びを上げる。坂本の奴、まさか……

「だろう？ 俺だつてこの現状に大いに不満だ」

「いくら学費が安いからつといてもこの設備はあんまりだ！」

「そもそもAクラスだつて同じ学費だろ！？ 余りにも差が大きすぎる！」

「みんなの意見はもつともだ。そこで代表としての提案だが……」

ここで坂本は一回区切つて、言い放つ。

「我がFクラスはAクラスに試験召喚戦争を仕掛けようと思う！」

第2話（後書き）

どうでしたか？

次回もお楽しみに。

第3話

問題

以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- (1) 得意なことでも失敗してしまうこと
- (2) 悪いことがあったうえに、さらに悪いことが起きる喩え

姫路瑞希の答え

- (1) 弘法も筆の誤り
- (2) 泣きつ面に蜂

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら“河童の川流れ”、“猿も木から落ちる”。(2)なら“踏んだり蹴ったり”、“弱り目に祟り目”などがありますね。

土屋康太の答え

- (1) 弘法の川流れ

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井明久の答え

- (2) 泣きつ面蹴ったり

教師のコメント

君は鬼ですか。

吉井明峯の答え

(1) 狙い撃てないロックオン・ストラトス

教師のコメント

もう一度言います。趣味とごっちゃにしないでください。

「FクラスはAクラスに“試験召喚戦争”を仕掛けようと思う！」

壇上に上がった雄二の提案。それは戦争の開戦。だが、内容を知っているクラスメートにとっては賛成するはずもなく、

「勝てるわけがない！」

「これ以上設備が落とされるなんて嫌だ！」

「姫路さんが居たら何もいらない！」

非難の嵐が巻き起こった。当然と言えば当然、試験召喚戦争は成績が勝敗を左右すると言っても過言じゃない。負ければ設備がランクダウンする。今の設備より下があるのかどうか不明だが……ともかく、それを知っているため誰もが反対なのだ。

だが、坂本はそれをものともせず開戦の提案をしたとき同様に堂々とした態度を崩さずにいた。ある程度治まったところで、不敵な笑みを浮かべて口を開く。

「全員がそう言うのも分かる。だが、俺が勝算もなしにそんなことを言うと思うか？」

坂本がそう言うかどうかという事だ？と周りが騒ぎ始める。俺は何か考えでもあるのかと思いつつ、坂本の話に耳を傾けた。

「今からその根拠を説明してやる」

そう言うって坂本はまず姫路の近くを見た。そこには、

「おい、康太。いつまでも姫路のスカートを覗いていないで、前に出て来い」

「……！！（ブンブン！）」

「は、はわっ！？」

畳に顔をひつつけて、正々堂々と姫路のスカートの中を覗いていた変態がいた。そう、変態だ。こんなのが兄さんの友達なんて認めない。指摘された奴が覗きの証拠を隠しながら前に出てくる。

「紹介しよう、こいつがあ有名なムツツリー二だ」

「……！！（ブンブン！）」

ムツツリー二と聞いて、クラスがざわついた。その名は男女それぞれ反応は違うがあるが正体は不明。その人物が今目の前にいる。

「バカな、奴がそうだというのか？」

「だが見る、いまだ必死に手で押さえて隠そうとしているぞ？」

「ああ、ムツツリの名に恥じない姿だ」

「????？」

周りがざわつく中、姫路だけは疑問符を浮かべていた。俺はそのまま知らない方が幸せだと思う。

「姫路のことは説明するまでもないだろう。皆だってその力は知っているはずだ」

「えっ？ わっ、私ですか!？」

「ああ、主戦力だ。期待している」

彼女は前も言ったとおり、Aクラスの中でも上位に位置する。だから主戦力と言えば当然だろう。

「そっだ、俺たちには姫路さんが居るんだった!」

「彼女ならAクラスにも引けを取らない!」

「ああ、彼女がいれば何もいらない」

さつきから姫路に対してラブコールを送っている奴がいるが何なのだろうか。

「木下秀吉だっている」

「おお……!」

「アイツは確か、木下優子の……」

秀吉は学力ではなく、演劇部のホープとして有名だ。旨く使えば攪乱としても使えるだろう。

「当然俺も全力を尽くす」

「坂本って、確か小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？」

「それじゃあ、実力はAクラスレベルが2人もいるって事かよ？もしかしたらやれるんじゃないか？」

「ああ、何かやれそうな気がしてきた!」

盛り上がるFクラス内の土気。俺は面倒くさいことになったため息を吐いた。ただでさえ兄さんと共に教師の手伝いで追われているのに、この上戦争なんて起こったら……

「それに吉井兄弟だっている！」

シーン……

その瞬間、一気に盛り下がった。その空気に反応して兄さんが文句を言い始める。

「ちょっと雄二！ どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！ 全くその必要はないよね！？」

「誰だよ、吉井兄弟って」

「聞いたことないぞ？」

「そこら辺の雑魚じゃねえーか？」

「そこ！ 僕のことはどうでも良いけどミネの事まで侮辱するのは許さないよ！」

口々に愚痴り始めるFクラスの連中を見て兄さんが俺を庇う。俺としてはどうでも良いのだが……俺は兄さんに落ち着くように言う。

「兄さん、落ち着け」

「ミネ！ でも……！」

「ここで騒いでもどうにもならん。なら、水に流して聞かなかったことにしよう」

「……（グッ）」

俺が兄さんを宥めると兄さんは悔しがりながらも引き下がった。そ

れを見届けた坂本がさらなる追い打ちを掛けてくる。

「そうか、知らないようなら教えてやる。そいつらの肩書きは>観察処分者<だ」

「……ッ！（ガタッ！）」

「兄さん！」

不名誉極まりない肩書きを明かされて拳を握り締めて立ち上がる兄さん。俺はそれを止める。兄さんも俺の顔を一瞬だけ見て落ち着いたのか席に座った。

「……それってバカの代名詞じゃなかったか？」

「……フフッ」

誰かの呟きに俺も少し兄さんの怒りを晴らそうと呟きに反応するかのようには嘲笑する。それに反応する呟いた本人。

「……何だよ」

「いや、おかしな話だなっと思ってな」

「おかしな話？」

「そうだろ？ そのバカの代名詞と同じクラスにいるって事はお前も“同類”ってことだろ？」

「なっ……！」

俺は仕返しが終わるのと同時に兄さんと共に席に着いた。先ほどの挑発に乘せられて若干名が敵意を向けてくるが俺は何ともないように受け流す。

「あ、あの！ 観察処分者ってどういうものなんですか!？」

嫌な空気になったのを払拭するかのように姫路が観察処分者とはどういうものか、質問する。坂本は即座に答える。

「あつ、ああ。観察処分者ってのは具体的には教師の雑用係だな。力仕事等の雑用を、特例としてもものに触れられる召喚獣でこなすといった感じだ。ただし、フィードバックがつかない」

坂本の言うとおりで俺たち兄弟は無償で教師達に対して雑用を押しつけられている。監視付きなので良いことは何一つとしてない。

「おいおい、それじゃあ試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しんで事だろ？」

「だよな、おいそれと召喚できない奴が一人いるって事だよな」

口々にもまたしても俺たちに対して余計な荷物を持ったと愚痴り始めた。こいつら……！兄さんも事実のため反論できない。

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」

「だったら何のために言ったのさ」

坂本のフォローの“フ”の字もない言葉に憤りながらも押さえがちに呟く兄さん。

・・・・・・・・・・

俺は一つの決断をする。

「とにかくだ。俺たちの力の証明として、まずDクラスを征服しようと思う！皆、この境遇には大いに不満だろう！？」

『当然だ！』

「ならば全員筆を取れ！出陣の準備だ！！」

『おおーーーーー！！！！』

「俺たちに必要なのは卓袱台じゃない！ A クラスのシステムデスクだ！」

『うおおー……！！』

「お、おおー……」

雰囲気を押されながらも姫路は小さく拳を振り上げる。兄さんはその懸命な姿に和んでいるいたが、そこに坂本から一言。

「明久にはDクラスへの宣戦布告の為の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

「……ねえ、雄二それって確か「行こう、兄さん」えっ、ちょっとミネー！」

俺は兄さんが何かしら文句を言う前に兄さんを引き連れて、教室を出た。後ろで何か坂本が言っているが無視だ。俺は何かと言っている兄さんと共にDクラスへと向かった。

「失礼しまゝす、Fクラスです。Dクラス代表はいますか？」

兄さんがDクラス入って代表を捜す。そこから数分、代表らしき人物が現れた。一見すると平凡そうな少年である。

「俺がDクラス代表だけど……何か用かな？」

「あつ、はい。えっと……」

代表と名乗る人物が兄さんの対応に出てくる。俺は後ろから兄さんの後ろにつく。

「僕たちFクラスはDクラスに対して宣戦布告をします」

『なにい！？』

「開戦時間は今日の午後からです。その時はよろしくお願いします」

『試召戦争だと！？ 下位クラスの分際で生意気な……！』

『生かして帰すな……！！』

「わっ、わああ！」

宣戦布告に対して生意気だと逆ギレして襲いかかるDクラスの連中。代表もさすがに不味いと諫めようとするが、止まらない。俺は兄さんを脇に抱えると、ある手帳を取り出した。

「これは俺が偶然知ってしまった『清水美春、お姉様に捧げる愛のポエム集』の内容だ」

俺がいきなり見当違いのことを喋り始めるが、向こうはお構いなしだ。距離はそう遠くない。俺は回避体勢に入りながら、内容を喋り始める。

「『瞳 清水美春 吸い込まれるその瞳。見つめ……』」

シュ！ カカカッ！！

「おっと」

「ぎゃああ……！！」

喋り始めた直後、どこからかナイフとフォークが飛んできてそれを避ける。あいにくと俺たちのすぐ側まで来ていたDクラス連中は直撃したが。

「な、何！？ 何なの！？」

「ザキーーーーー！！ 何でその内容をあなたが知っているのですか！！」

いきなりの出来事に驚く兄さんを尻目に、直撃して倒れたDクラスの連中を蹴り飛ばして、叫びながら現れたのは、ツインドリルテールこと清水美春だ。俺は少なからずこいつと関わりがある。俺は手帳を仕舞いながら対応する。

「おいおい、人のことを死の呪文みたいに呼ぶな」
「あなたなんて死の呪文で十分ですわ！！」

嫌われたものだ俺は苦笑しながらため息を吐く。

「大体何でその内容をあなたが知っているのですか！ 超極秘事項なのにい……！」

「さああ？ どうしてだろうな？」

俺ははぐらかしながら面白い反応をする清水をからかう。相変わらずからかいがある奴だな、こいつは。俺は抱えていた兄さんをおろす。

「ミネ、知り合い？」

「知り合いというより腐れ縁だな、こいつとは」

俺は兄さんに説明をしながら清水の方を見る。清水はなおも文句を言いたそうにしていたが、あることにハッと気づく。

「あなたがFクラスと言うことは……！」

「ああ、安心しろ」

「何が安心ですか！？ ただでさえ強力なあなたがいるのにその上、

ブラコンパワーが発揮されたら……！」

ブラコンパワーとは失礼なと思いつつも、俺は清水に言い放つ。

「俺たちは出ないぞ？」

「……えっ？」

俺が言いはなった瞬間、清水は固まった。

第3話（後書き）

どうでしたか？

それではどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5208z/>

バカと兄弟と召喚獣

2011年12月25日13時49分発行